平成２６年度　岡山県立倉敷琴浦高等支援学校　学校評価書

校 長　　河 田 い づ る

1　自己評価

Ⅰ　評価結果（別紙参照）

Ⅱ　分析・改善方策

（１）授業の改善充実

①「お互いに認め合い、学び合う職員集団の形成を図る」は、取り組みの中で同僚性を育むことができた。互いに学び合いながら、ICT活用を推進している。学校評価アンケート（教員用）でも、授業づくりの研修に努めている割合が向上している。

②「個別移行支援計画」「個別の指導計画」を活かした授業づくりを進め、授業力の向上を図る」は、学校評価アンケート（保護者用）で肯定的評価が90％、同（教員用）で95％を示し、いずれも高い割合だった。また、授業参観感想カードを活用し授業の反省をすることで、授業力の向上を図った。

③「キャリア教育の視点に立った指導内容の体系化を図る」は、一貫性のある指導内容と教育課程を検討している。進路システムを導入し情報共有が推進できた。

（２）職業教育の充実

①「専門教科における指導の専門性を高める」及び「専門教科において、地域と連携した指導の充実を図る」は、外部講師活用に関して、学校評価アンケート（保護者用）で肯定的評価が87％、同（教員用）で94％を示した。また、職業教育の充実に関して、同（保護者用）で92％であり、専門教科の指導内容に関して、同（教員用）で85％を示した。今後とも、生徒の実態把握、指導内容や方法の検証を行いながら、取り組み方の改善を図る必要がある。

②「関係機関と連携したアフターケア体制の確立を図る」は、新たな離職者が出た。アフターケア体制の見直しを図る必要がある。生徒の10年先、20年先を見通した指導体制を構築する必要がある。

（３）理解啓発の推進

①「保護者、地域、関係機関等に積極的に情報発信する」は、ＱＲコードによるアクセスしやすさを提案した結果、アクセス数は昨年度比18％増加した。平成27年度入学者選抜の倍率は1.38倍であった。中学２年生を対象としたオープンスクールを実施した。

②「本校の生徒を理解してもらう機会として、地域の行事やボランティア活動に積極的に参加する」は、「せんい児島瀬戸大橋まつり」や「DENIM　oh ！雛」コンテストに応募するなどし、体験の場を広げたり経験を積むことができた。ボランテイア参加者数も増加する傾向があり、生徒の自主性が育っている様子が伺われる。

③「地域の高等学校や中学校との交流及び共同学習の取り組みを進める」は、新たに地域幼稚園との交流を行った。倉敷鷲羽高等学校との交流及び共同学習では、参加者数に増加がみられた。

2　学校関係者評価委員名

重松　孝治（川崎医療短期大学　講師）
大島美栄子（倉敷障がい者就業・生活支援センター　所長）
片沼　靖一（琴東地区社会教育コミュニティ推進協議会　会長）
鴨田　時典（児島産業振興センター　センター長）
井原　忠雄（児島ハローワーク　統括職業指導官）
市原　由美（本校PTA　会長）

3　学校関係者評価

【第１回学校関係者評価委員会】

・卒業後の支援をどのタイミングで引き継ぐのかが課題であり在学中にその生徒と関係が取れるとよい。何かあった後ではなく何もないうちから支援を始めるのが良い。
・離職に係わる相談の中でコミュニケーションでのつまずきが多い。「あいさつ」が大切であり、仕事の中でうまく褒めてもらうことでさらにモチベーションが上がる。意欲は大切。何でこの仕事をやるのか、自分にとってどんな意味があるのかを考え、意欲を高めてほしい。職場のリーダーによってもやる気　は左右される。リーダーが変わったことにより仕事が続かなくなったケースもある。相談があった場合は直ちに関係機関に連絡して繋いでいる。
・在学中、リーダータイプで手のかからなかった生徒は、その生徒の配慮点や特性をつかみ損ない、課題を見逃すことになっていないか。
・企業からのナチュラルサポートをどうやって得ていけるかが鍵になる。就職する職種が様々なので、サポートをまとめた複数のパンフレットを用意し、就職が決まってから企業に渡して支援をお願いすることも有効だ。
・わからない時にわからないと言えず、気付いてもらえない場合が多い。どういった言葉かけが配慮につながるのかを準備しておく必要を感じる。優しい言い方よりも本人にとって具体的となる説明がよい。また、ミスしたときの具体的な対処を本人に伝えておくことも必要。その場合、会社にはどのように指示すれば有効かを伝えておくことが大切である。
・生徒の特性を踏まえて進路指導をすることで就職後、長続きする。
・ミスしたときに「申し訳ありません。」と言葉が出る。そのことがとても大切である。
・ホワイトボードの板書が非常に整理されており、チャート図で書かれていたりして分かりやすかった。先生方の努力の表れであり、その工夫をヒントとして企業へ伝えていけばよいと思う。
・年々小中高と上がるにつれ地域とのつながりがなくなっていく。もっと交流できる場があったらよい。ボランティアを一緒にするなど呼びかけたい。
・琴浦はいじめをする雰囲気はないように思う。中学生の年頃は13歳と14歳を境にして殺伐とする。
・輪を広げて行くことが大切。良い評判（良い生徒がいて良いフォローがある）が大切である。

【第２回学校関係者評価委員会】

・就労先がどうしても都市部に集中しており通勤が遠くなる。できれば地元で就職したい。本人に合う支援やフォローの仕方を学校が上手く繋いでくれたら就職できる幅が広がると思う。企業側も本人の成長の様子が分かるような評価を見せてもらえれば雇用しやすいのではでは

ないか。期限がある通学なら何とかがんばれるのだがこの先ずっと通勤しなければならないと思うとやはり地元での就職が望ましい。
・その人の特徴をPRすることが難しいので評価シートなどあればよい。（こんなことができる。こうしてもらうとうまくできる。）
・高等支援の生徒の場合、外部機関の利用は少ないようなので１年生のうちから相談機関等を利用する経験をしておくとよい。就業生活支援センターと一緒に作った企業向けガイドブックに「相談支援の輪」が載っているので、その連絡先を頼りに連絡をとられたらよい。
・本人の特性・特徴をどう伝えていくか。１８歳になるので本人が上手く主張できるようになってほしい。本人が自分のことを伝えていけるように力を付けさせたい。
・学校評価アンケート（生徒）より１年生のうちは入学して間もないので明るく楽しいのだろうが３年生になると出口が近づくからだろう厳しい意見になる。それは社会の就職事情が今だに厳しいことも原因だろう。アフターケアを充実させていくことが課題になる。
・先生に本人や保護者の意見が届いているか。
・学校評価アンケート（生徒）よると、１年生は先生に相談できていない割合が高い。改善するためには相談する日や相談時間を設けて相談する経験をさせることが必要になる。
相談する経験がないと企業に行っても本人から相談できない。（尋ねると話すが、自分からは話せない）相談する場面を作り、相談する経験をさせるといい。
・自己評価と先生の評価を合わせることが必要。（他者評価を持たない生徒に自分がどう見られているかの話をしてもかみ合わないだろう）
・どこがずれているかを本人に知らせその次にどうすればよいのかを指導する。思いをはき出させたりそれを整理させたりして相談することをきちんと経験させていくことが大事になる。
・今年、学校評価アンケート（生徒）を実施したことは良かった。生徒の声をきちんと聞くことは大切である。

【第３回学校関係者評価委員会】
・現場実習で、具体的なことが現場のリーダーに伝わっていないこともある。打ち合わせの資料だけでも現場のリーダーに渡ると理解を得られる。
・「何時から何時までは〇〇をする」等、1日の過ごし方は話をしていると思うが、メンター（年齢の近い指導をする社員）がいて手順を伝えるようにすると現場実習などがスムーズにできると思う。
・共に現場で働く人に、会社の面接に参加してもらうとスムーズな実習や就労につながるのではないか。
・学校評価アンケート（生徒）３年生の結果で「学校が楽しい」と答えている割合が少ないのは、色々なことに不安を感じているためかと思う。
・アンケートにいじめに関する項目がないように思う。教師が観察することで把握ができているのだろう。以前、高校で行ったアンケートで教師がするサポートと生徒がしてほしいサポートが全くずれていたことがある。琴浦のアンケートを読んで、先生は間違った指導はしていなくてもその指導を生徒がそう感じているということは事実だと捉えることはできる。
・話し合い、話し方の学習を取り入れたい。「話し合い」、「相談」とはこのようなものだと教えていかなければならない。生徒と教師が気軽に話ができ、楽しいと思える学校を作り、社会に出てもそう思えるような取組ができるといい。

・求職登録や移行支援会議などで生徒の話を聞くと希望していた仕事とはちがう仕事に決まった生徒がいるケースがあった。生徒と先生のやりとりがあるのだろうか。
・人に伝える力が大切である。自分がしてほしいことを伝えるノウハウのチャンネルを増やして欲しい。そうすれば、会社に入ったときに上司に伝える手段となり、職場での居場所確保となる。簡単な入力作業をしてもらいたいという企業もある。製造業でもパソコンの仕事はある。
・最近は我慢できない子どもが多い。その結果、辞めてしまう。環境になじめない場合がある。人間関係がうまくない。職場も優しい人ばかりではない。異年齢との交流を教えていくことが大切だと思う。
・学校祭で力強い絵があった。学校のカリキュラムに入らないかもしれないが、生徒の特性・特技をのばしてやる、特性を引き出すことを考えてあげてほしい。一人一人何か一つ才能を身に付けさせたい。
・今年、地域での活動があった。家政の生徒が製作し販売しているものはきれいに仕上がっている。「購入したい」と言う声をたくさん聞くが、手に入れる機会が限られている。アンテナショップを設けるなど工夫をすると手に入れてもらえ、琴浦に対する理解も広がる。
・アンケートのいじめに関する項目に無回答が多い。その状態がいじめであるかどうか、どのタイミングで相談すればよいか、わからないケースもある。
・先生は「何かあったらまた相談してください」と言うが、当事者は「何か」「また」は、つかみにくい。どのようなときに相談すればいいのか、そのズレをどう補うかは課題である。
・自己肯定感を高めるには、その生徒が褒めて欲しいときに褒めなければならない。褒められているポイントのズレがある。授業だけで褒めるのではなく、その他のことでも褒められることが必要である。授業＋αで自己肯定感を高める取組が必要である。

4　来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

○生徒情報の進路先への伝達方法の検討
　企業面接の時に作業場の見学を行い、生徒への関わり方を示すサポートブックの活用することで、生徒情報が伝わるように工夫する。
○生徒や保護者のニーズに応じた進路指導のあり方
　現場実習後に相談週間を設定し、実習の反省や、生徒や保護者からのニーズを収集する。
○生徒と教員間の信頼関係構築に向けての取り組み
　相談週間による取り組みの他、定期的な学校評価アンケート（生徒用）を実施し、生徒の実態把握に努める。また、スクールカウンセラーによる生徒へのカウンセリングと教員に対するコンサルテーションにより、生徒と教員間の信頼関係の構築を図る。
○授業力向上に向けての取り組み
　発達障害の標準的な指導法を全職員で実践する。年度当初に、標準的なスケジュール、板書、掲示、視覚支援、音声言語による指示方法等について研修し、全職員一貫した指導を行う。